



宮田親平さんが残したものの

吉田 由季子

宮田親平さんが亡くなられた。計報に接したとたん、私の中には言葉にならない思いがあふれ、知らせてくれた田中尚さん相手に、どうしてもいいことをぐだぐだとしちゃった。

肝心なことが言葉にならない。いまでも、まだ言葉にならない。

それでも、純パの会にとつての宮田さんの存在について、私が感じたことを、つたないながら記しておかなければならない、と思った。

純パの会にとつての「と書いたが、順番は逆だ。宮田さんがいらしたからこそ、純パの会は生まれた。宮田さんが書かれた「七たび生まれ変わったも、我、パ・リーグを愛す」(雑誌「サンパ」No.19、1981年1月20日号掲載)。この記事のインパクトたるや！ 現代は、たとえ片隅にあってもネットで情報が拾えたり、同好の士を探せたりする。だが、当時は事情が違った。パ・リーグ野球のファンは、報道でも片隅に追いやられる球団や選手を思い、個々の胸の中で無念さをかみしめるしかなかった。そのファンの思いを、1本の雑誌記事が掘り上げた。そうして1年後には、「純パの会」が旗揚げされた。

それから37年。存続の危機もあったし、さまざまな紆余曲折があった。それでも純パの会は続いていた。その間、宮田さんは会にとつてのシンボルであり、心の支えのような存在だったと思う。表立っての旗振りにはされなかったが、危機のときは手をさしのべておられた。私自身は運れての入会なので、リアルに見聞したわけではない。しかし、2002年に純パの20年史を制作したとき、資料を調べてわかったことがあった。純パの会は何度も、宮田さんによって救われた局面があったのだ。

私にとつての宮田さんは、入会当初は口をきくのも怒れ多いような存在だった。宮田さんは決して偉ぶる方ではなかったが、このおしゃべりな私が、宮田さんの前に出るとおとなしくなってしまう。その緊張が少しほぐれたのは、東京ドームで行われた日本ハム対千葉ロッテの合同観戦会。1990年代半ばだったと思う。シーズン初戦だった。ロッテの、あの外野応援団を初めて見た。球場全体を包むアカベラに、私はすっかり魅せられた。一緒に観戦した純パ会員は、みな同じ思いだったようだった。ふと気づくと、隣に座っていた宮田さんがいない。ロッテ側の外野席へ、見学に行つたようだった。ほどなくして戻つて来た宮田さんは、ポツリとおつしやつた。

「みんなの頭をなでてやりたい」。

私は、応援団への共感をそんな言葉で表現する宮田さんに、なんとも言えないあたたかなものを感じた。以来、宮田さんとの会話はいつも楽しく、教えていただくことも多かった。その機会がもう持てないのだ。

中野の教会で行われた葬儀は、宮田さんらしい穏やかな雰囲気にも包まれていた。参列者に配られた封筒には、宮田さんの御著書や略歴などとともに、「七たび」の記事全文のコピーが入れられていた。略歴の著作一覧には、科学ジャーナリスト大賞を受賞した作品などと同等の並びで、「七たび」が載せられていた。宮田さんは、「七たび」にあった最後そのままに、パ・リーグ愛をつらぬいて旅立られたのだ。

葬儀からの帰途、私はようやく思い至つた。ああ、なんということだろう。

私たち純パ会員は、みんな、宮田さんから頭をなでてもらっていたんだ。